

禍 マガツブ 記

田中啓文

Hirofumi Tanaka



マガツフミ

Hirofumi Tanaka

田中啓文

徳間書店

著者紹介 田中 啓文（たなか ひろふみ）

1962年、大阪府生まれ。神戸大学卒。93年、ファンタジー
ロマン大賞佳作を得て作家デビュー。99年発表の伝奇ホラー
『水霊 ミズチ』が日本SF大賞にノミネートされ、一躍注目を
集めた。21世紀のホラー、SF界をになう期待の異才である。
著書に『異形家の食卓』『銀河帝国の弘法も筆の誤り』等。

マガツ フミ
禍 記

著者 田中啓文

2001年 4 月30日 初版

発行者 松下武義

発行所 株式会社 徳間書店 〒105-8055 東京都港区東新橋1-1-16

電話 03-3573-0111（大代表） 振替 00140-0-44392

本文印刷所 長苗印刷㈱

カバー印刷所 近代美術㈱

製本所 ナショナル製本協同組合

© Hirofumi Tanaka 2001

Printed in Japan.

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

編集担当 柳 久美子

ISBN4-19-861336-2

褐記

M A G A T S U F U M I ● C O N T E N T S

313	299	247	189	149	141	65	13	5
伝奇原理主義宣言——あとがきに代えて	梶記〔三〕 マツノノミ	黄泉津鳥舟 よもつとりふね	妄執の獣 まじし	怖い目	梶記〔二〕 マツノノミ	天使蝶 てんしちよう	取りかえっ子	梶記〔一〕 マツノノミ

装画・本文神代文字

装幀

藤原ヨウコウ
はらだぜりい

マ
ガ
ツ
フ
ミ
禍記

(一)

禍記というものがあつた、いや、今もあるかもしれないということを聞かされたのは、伝奇ホラー作家で妖怪にも詳しい待田真司からだつた。

待田は七十歳をこえた老大家で、オカルト雑誌〈ダークゾーン〉で日本文学に登場する妖怪の系譜に関するエッセイを連載しており、東澤恭子^{ひがしざわきょうこ}は待田の担当編集者である。親が出版社の大株主という強力なコネで採用になった、入社まだ二年目の新米編集者である恭子^{きょうこ}のことを待田はなぜか気に入つて、ことあるごとく呼び出しては無意味な打ち合わせをしたがるのだが、半ばほけが来ているのか、その話があまりにくどいので、恭子はいつも頭の血管が切れそうになる。

妻に先年死に別れた彼は、一人暮らしで、顔も洗わず、齒も磨かず、風呂にも滅多に入らないので、目やにが厚くたまり、頭髮やコートの肩はふけだらけだし、いつも首の付け根を爪でがしがし引つ掻いていて、不潔なこと限りない。頭皮が疥癬^{かいせん}に冒^{おか}されていて、に

ちやにちやした青緑色の膿に半ば覆われた頭部は青カビの生えた餅のように見える。自分の外観が他人の目にどう映るかがわかっていないのだ。会うだけでも暗い気分になるし、手を握られたり、尻を触られたりすると、顔を殴ってやろうかと思うときもあるが、手が腐りそうなので我慢する。何より鬱陶しいのは、彼の専門である妖怪や怪物についてぐだぐだどうでもいいような蘊蓄を傾けることだ。

「ぼくはね、妖怪が好きなんだ。妖怪は、人間を遥かに超えた力を持つておる。今のぼくにその力があれば、この腐りきった世の中から腐りきった人間を一掃して、樂園を作るんだがねえ」

神保町の喫茶店での打ち合わせの席上で、待田は、会うなりそう切り出したので、恭子はいやーな予感がしたのだが、案の定だった。待田はいつものようにねちねちとした言い方で恭子にからみだした。

「あのね、あのね、ぼくはね、死にたいんだよ。家内を亡くしてからぼくは死んだも同然なんだ。家内の死によってぼくは壊れてしまった。でもね、でもね、ぼくは死ねない。自殺する勇気がないんだ。それで、こうやって愚にもつかない文章を書いては糊口をしのいでいるというわけさ。あのね、ここにいる待田真司という作家はね、いわば残骸、抜け殻なんだ。本当の待田真司はね……」

老作家はしゃがれ声を一段と低くして、

「向こうの世界にいるのさ」

「向こうの世界？」

「私が愛する魑魅魍魎の世界さ。ああ……向こう側に行けたら……」

待田は大きな音をたてて鼻汁を啜った。数人の客が振り返るので、恭子は恥ずかしかった。

「そんなことをおっしゃいますが、先生は伝奇小説の分野では今でもすばらしい仕事をなさっております。抜け殻だなんてとんでもない」

恭子は心にもないお世辞を言った。二年間の編集者としての経験から、こういった処世術も身につけたのだ。

「ふん、何が伝奇小説だ。私が今書いているもの……あれが伝奇だといふのかね」

「違うんですか。先生が月刊○○で連載なさっているような、古代神とか陰陽師とか呪文とか妖怪とかが出てきて大暴れするような小説が伝奇小説なんじゃないんですか」

「ぐふふふふふ」

待田は蝦蟇のような笑い声をあげ、恭子はぞくつとした。

「真の伝奇は真の妖怪を語るべし。老いさらばえたほろ雑巾のようなこの私を見ろ。どこにそんな筆力が残っておる。私の筆はもう二十年も、真の妖怪を活写したことなどないのだ」

「失礼ですけど先生、真の伝奇とか真の妖怪とか、若い読者にはそんなこたわりなんか無いと思います。どこかの孤島の言い伝えとか、鬼や魔物が棲む洞窟とか、古代の邪霊を招

喚する呪文とか、そういったものが出てくればいいんです。ようは読者は伝奇っぽい雰囲気さえあればいいのであって……」

「わかつとらんね！」

待田はそう言つて何度も頭を横に振つた。

「ああああ……あと二十歳、いや、十歳若返ることができたら、禍記を探しにいくのだが……それもかなわぬ夢となつたか……」

「マガツフミ……？　何ですか、それは」

「ほう……知らんかね。オカルト雑誌の編集者としては失格だねえ。業界の一部では非常に有名な書物だよ」

「どんなことが書いてあるんですか」

「いや……それは……」

待田は考え込む風情になつて、

「私の口からは言えないね。そんなことむやみに口外したら……」

彼は急におどおどした態度になつてあたりを見回した。

「教えてくださいよ。気になるじゃないですか」

「うむ……まあ、一種の古史古伝だが……」

老人の表情からは、いらぬことを口にしてしまったという後悔がありありと感じられた。
「古史古伝という上、^{うえつふみ}上記とか九鬼文書とか東日^{つが}流外^{るそとさんぐんし}三郡志とか秀真^{ほつまつたえ}伝とかカタカムナ

文書とか……」

「ま、そういうことだ」

「どうせ全部偽書なんですよ」

「君ねえ、偽書というのはでたらめという意味じゃないよ。正史にない真実が記録されているからこそ抹殺されたということもあるんだ。たとえば、今の天皇家が正統ではないという内容のものであれば、葬り去られるしかなかるう」
ほうむ

「じゃあ、禍記も……」

「禍記のことは、もういい。少し用を思い出した。今日はこれで失礼する」

蒼白な表情になった待田は、杖をつき、太った身体をよたよたと喫茶店の入り口に運んだ。そこで、振り返ると、

「今の話、誰にもしてはいかんぞ！」

店中に響くような大声でそう言った。



恭子はトイレに入ると、念入りに手を洗った。待田と会々と、何だか不潔さが伝染るような気がして嫌なのだ。彼女は、トイレの鏡に映った自分の姿を見た。そして、洗面台に痰を吐くと、唇を塗り直し、釈然とせぬ思いで喫茶店を出た。禍記……どう考えても聞いたことがない。一般人ならともかく、オカルト雑誌の編集部に二年弱在籍していて、全く

耳にしたことがない古史古伝などあるだろうか。

携帯にメールが届いていた。歩きながら読む。タカシからだ。「ゴメン、ザンギョウ。コンドウメアワセ」……。こめかみのあたりで、ピキッという音がした。デートをすっばかされるのはこれで続けて三度目だ。タカシの会社に電話しようとして、思いとどまった。年下の男にしがみついているように思われたくない。恭子は、別の喫茶店に入り、クリームパフェとクリームあんみつとストロベリーショートケーキを注文して、一気に平らげた。そして、トイレに入り、喉に人差し指を突っ込んで、今、食べたものを全部もどした。生クリームと餡にまみれたみかんとメロンとチェリーといちごとカステラと寒天が便器を滑り落ちていく。まだだ。まだ吐き足りない。胃や腸も一緒に吐いてしまいたいぐらいだ。もつともつともつと吐きたい。恭子は、胃液と唾液でぬるぬるの指をなおも喉の奥に突き入れる。頭がかあつと熱くなり、涙と鼻汁がだらだら出てくる。

（私……何やってんだろ……）

便器から顔を上げ、ハンカチで口の周りを拭うと、べったり血がついた。嘔吐のしすぎで、喉のどこかが切れたらしい。よくあることだ。恭子は、もう一度念入りに口紅を塗り、トイレの外に出た。そんなはずはないのだが、店中の視線が彼女に向けられているような気がして、急いで勘定をする。レジを打ち間違えた、バイトらしい若い女性店員に思わず舌打ちをしたら、じろつと睨み返された。

その途端。

周囲の景色が滲むようにぼやけた。赤、青、黄、緑、黒……全ての色彩が混じりあい、魔女のスーブのようにどろどろになり、何ともいえない汚らしい色になった。最初は、貧血かと思ったが……そうではなかった。壁の染みや天井のひび、絨毯の毛羽などがぶくぶくと立体的に浮き上がり、骸骨のような手足が生え、触手や羽根が伸び、目や口が現れた。それらの異形のものたちは、長い舌を突き出し、牙を剥き出し、皮膚疾患に罹ったような全身から黄色い体液を滴らせ、にやにや笑いを浮かべながら、ゆっくりと恭子に近づいてきた。

マガ……ツ……

フミ……

読めるぞよ……

おまえなら……

読める……

レジがあつたあたりに、大きな黒い穴があいていた。その中から、何百何千という無数の白い、細い手が突き出ており、ゆうらゆうらと揺れながら、恭子を手招きしている。穴の縁からは、ミミズのような、サナダムシのような生き物が、ずるずると外に這いだそうとしている。

こちらに……

来い……

来るなら……

来い……

恭子は悲鳴をあげた。



取りかえ子

